

中
2022

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で21ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

(第2回)

受験番号	
氏	名
	ふりがな

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ぞくぞくつとするような話ねえ」

ママは紅茶をいれながら、しばらく考えていた。それからポットを持って、テーブルに運びながらいった。

「こわいかどうかはわからないけど、ほら、ママ、よく帰りがおそくなることあるでしょ」

「うん」

まいも、ティーカップとマグを運びながら返事をした。パパは単身赴任で、今は家にいないけれど、二人は共働きだ。

「駅の大通りを曲がったところから、すごく暗い坂道になるじゃない」

「うん、なるなる」

怪談っぽい予感がして、まいはいすにすわるとすぐ、身を乗り出した。

「いやだなあ、心細いなあ、と思うとき、必ず黒い影のようなものが現れるのよ」

ママの声が低くなり、まいはすっかり引きこまれた。

「それで？」

「それでおしまい」

終わり、ということ強調するためか、ママは、（I）をきつと結んだ。

「そんなあ。その影、どこから出てくるの？」

「わかんないわよ、そんなこと。でも、別に悪さするわけでもないし」

「でも、気味悪いでしょ」

ママは、首を縦にも横にもふらず、

「うーん……。それがそうじゃないんだな。ブラッキーのこと、思い出して」といった。

ブラッキーというのは、まいの祖母の家、人里はなれた山の中の、ママの実家で飼っていた犬のことだ。まいが小さいころに死んだ。まいもときどき話を聞いたことがあるけれど、くわしくは知らない。死んだ時のこと以外は。

「ブラッキーって、ママがいくつぐらいのころから飼っていたの？ おばあちゃんのところはずいぶん昔の写真があったよね、おじいちゃんと一緒に写っている」

そのおじいちゃんも、ブラッキーが死ぬ前になくなっていった。ママは、紅茶をつぎながらゆつくりと、

「ブラッキーはね、ちょうど、ママがまいぐらいの歳のころに、おじいちゃんの友達の家で生まれたの。それを、おじいちゃんがもらってきたの。前に育てていた犬がなくなつたあとだったから、ママは、最初はあんまりかわいがる気がしなかった。なんだか、前の犬を裏切るような気がして。そこでブラッキーをかわいがったら、前の犬、チェリーの思い出が消えていくような気がして。^①でも、そうじゃないよって、おじいちゃんがいったの」と話し、それからひと口紅茶を飲むと、思い出を頭の中から引き出すように、また話し始めた。

「おじいちゃんのいうとおりだった。ブラッキーが何かするたびに、ああ、チェリーとちがうとか、チェリーもこうしてたとか、チェリーのことを生き生きと思ひ出せるようになった。チェリーに注いでいた愛情が、消えてしまふんじゃないの。そういうものって、どんどん増えていくものだったのよ。おじいちゃんは、そのことをいつていたのね」

まいは、この話にひきつけられた。

「親友だと思ってる子以外の子と仲よくなっても、その子への友情がなくなったわけじゃないもんね」
「そうそう。友情だって、どんどん増えていくものよ。友達それぞれのちがいがわかるにつれて、その子の持ち味もよくわかるようになるし」

② そうだよね、とまいは、いつもより深くうなずいた。ママは、あれ、学校で何かあったのかな、というような顔をしたが、すぐにもとの話題にもどった。ママは、学校のこと、あまり深入りしたからないからね、とまいは心の中で思った。

「そのブラッキーは、ブラック・ラブラドルと日本犬の雑種で、見かけはブラック・ラブラドルに近かったけれど、もつと、何か、落ち着きみたいなのがあった。いつも、おじいちゃんの散歩にくっついていて。近所の、といつても山一つこえたところだけど、その犬が、ある時リードを付けたまま脱走して、途中でそれが木の根っこか何かからまっちゃんって、死んでたところを発見されたことがあったの。それを聞いてから、おじいちゃんもブラッキーにリードを付けることをやめたの。この犬にはリードは必要ないよ、って。それからブラッキーは、どこへ行くにも自由だった。今では、そんなこと許されないけどね。飼い犬を野放し、なんて。でも、わたしから見ても、ブラッキーは、^A分別の^Bある犬^Cだった」

「わたしのおもひ、してくれたんですよ」
まいは、幾度となく聞かされた話を思い出した。ママは、そうそう、と今まで何度もくり返した話を、うれしそうにまた語り始めた。

「よちよち歩きのまいの横を、つかずはなれず歩いてた。ある時、まいがいないって、うちじゅう大きわざになっ
ているところへ、突然、知らない人が訪ねてきて、表の道路を小さな女の子が歩いていたので、山の中だし、気
になって声をかけようとしたら、そばについていた犬からうなられた。もしかしたら、お宅のじょうちゃんです

かつて」

ママはおかしそうに、クックツツと笑った。

「あわてて表の道路に出たら、確かに、ずっと先に小さな子と犬がいる。ブラッキーが車の通る側を歩いて、まゐを（Ⅱ）していたのよ。まゐの歩調に合わせて歩きながら」

「それ、前も聞いたけどさ、だったら、ブラッキーは、わたしが『脱走』しないようにすることもできたんじゃない」

まゐは、その「小さな女の子」が、まるで自分と関係のない子のようにいった。

「だって、あなた、そのころ歩くことが得意で得意で、どこまでも歩いてみたがったのよ。町の家では、事故があったらいけないから、ママが家事をしているときは、サークルの中に入れていたけれど」

③ それって、ブラッキーよりも人間あつかいされたくないみたい、とまゐは思った。まあ、いいや、わたしの知らないころの話だもん、知らない小さな子の話として聞こう。

「おばあちゃんのところでは、どこでもはだしで歩いていたっけ。ほら、台所は土足オーケーでしょ、そこへはだしで降りていって、そのまま畑まで行くので、ママ、最初、キャーキャーいってた。わたし、部屋で仕事してるからまいを見ててね、って何度おばあちゃんにいつても、はいはい、っていうばかりで、全然気をつけてくれないんだから。畑なんて、ばいきんだらけなのに」

それはたぶん、④ おばあちゃんの作戦勝ちだ、とまゐはひそかに思った。おばあちゃんは、いろんな菌がいるのは豊かってことだ、っていつていた。はだしで歩くと、大地とつながっている感じがしますね、といったこともあった。

「あなたが見つかったとき、ママ、大声でしかろうとしたの。そしたら、おばあちゃんが、まゐは、知らない景

色の中を自分の足で歩いて見てみたかったんだ、しかっちゃいけないっていった。ブラッキーは、そういうことがわかる犬だから、いざ危なくなったら、自分がなんとかするつもりだったんだろうって。そりゃ、^B 買いかぶりすぎじゃないかって思ったけど、でも、ブラッキーは、確かにそういう犬だったのよ」

ママは苦笑して、（Ⅲ）をすくめた。ここところは、初めて聞く話だ。まいは、ようやくその子が、自分と関係があるように思えてきた。

「ブラッキーは、そういう犬だった。まいと同じように、わたしもお世話になったのよ。おばあちゃんの家からは、バス停まで歩くと三十分はかかるでしょ。学校へ通っていたころ、部活とかでおそくなると、いつもブラッキーがバス停までむかえに来てくれたの」

「うっそお」

犬がそんなことするなんて聞いたことない、とまいは思った。

「本当よ。朝は出勤するおじいちゃんと一緒に家を出たけど、帰りはまちまちでしょ。最初は、おばあちゃんと一緒にむかえに来てただけど、ある時、おばあちゃんが、ブラッキー、時間だからあの子をバス停までむかえにいつて、つてたのんだら、すたすたバス停に向かって歩きだした、つていうのよ。それだけじゃなくて、何か取ってくるとか、にわとりを小屋に入れるとか、おばあちゃんのものたのむことは、たいていやってたみたい」

「ママのいうことは？」

「それがさ」

ママは、少し（Ⅳ）にいった。

「わたしについてはなにか、自分のほうが立場が上の、保護者のように思っていたみたいで、あんまりいうことはきいてくれなかった。おばあちゃんに、何かコツがあるの、つてきいても、にやりと笑って、ただ心をこめて

たのむのよ、としか教えてくれなかった」

その、にやりと笑って、というところが、いかにもあのおばあちゃんらしいので、まいは、思わず笑ってしまった。

「ともかく」

ママは、わざとコホンとせきはらいをした。

「見かけも黒くて、おそろしそうで、おまけに大きな犬じゃない。一緒の帰り道、たまに知らない男の人たちと通り過ぎても、明らかに向こうがブラッキーをこわがって、さけているのがわかったわ。ある時、どういうわけか、道のはしにドラム缶が落ちてたの。その少し前に、大きなトラックとすれちがったから、ああ、あれが落としていったんだなって思ったけど、^⑤なんとブラッキーは、わたしとドラム缶の間に立って、ものすごい声でそのドラム缶にほえ始めたのよ。頭を低く落として、すごいけんまくで、ほえたりうなり声を出したりして、せんとうたいせい戦闘態勢に入ってた。そんなブラッキーを見たのは初めてで、びっくりしたけど、ああ、そうか、ブラッキーは今まで、ドラム缶なんて見たことなく、来る道ではいなかった化け物が急に現れたんで、わたしを守ろうとしてるんだ、ってわかったの。熊かなんかみたいにしたのね。かいだこともないにおいがしてるし。なだめようとした時、しつぽが、すっかり足の間に入っているのに気づいた。それを見て、ものすごい恐怖を感じてるんだってわかったの。けど、ブラッキーは、わたしを守ろうとした」

ドラム缶と熊をまちがうなんて、ちょっとおまぬけだけれど、ブラッキーはいいやつだ、とまいはじんとした。そんな犬を飼っていたママが、うらやましくなった。

「次の日からは、それが生き物じゃないってわかったみたいで、ブラッキーが知らん顔するので、ブラッキー、これは何？ 昨日、あんなにほえてたのに、ってからかったら、あら、わたし、そんな物にほえました？ って

すました顔をして通り過ぎてたわ。バツが悪かったのよ、あれは」

ママは、思い出し笑いをしながらいった。まいも笑った。

「（V）、ママのいうことをきくときもあつたのよ。ママが、ブラッキーの食事係だったの。だから、『待て』と『よし』だけはよくきいたわね。食事のときだけじゃなくて、動作を止めるとき、『待て』。それを解除するとき、『よし』」

ママは小さな声で、「待て」とつぶやいた。昔を思い出しているのかもしれない。

「（V）、ブラッキーがいちばん好きだったのは、やつぱりおじいちゃんだった。おじいちゃんが無くなってから、ブラッキーはめつきり元気がなくなつて、食事さえほとんどなくなつたらしいの。おばあちゃんからその話を聞いて、どこか悪いのかもしれない、こつちに連れてきて、大学の動物医療センターで調べてもらう、つてわたしがいい張つたの。これ以上、ブラッキーまでいなくなつたら、つて考えて……」

そこで、ママはちよつと絶句した。ブラッキーがしばらく町に来ていたときのことは、まいもおぼろげに覚えている。

「^⑥今から思えば、ブラッキーには本当に悪いことをした。おばあちゃんは反対していたんだけど、わたしが、ブラッキーにまで死なれたら、わたしはつらいっていったら、折れた。わたしがおばあちゃんのことを心配してたのが、わかつたんだと思う。だつて、おばあちゃんは、まるつきり一人になつちゃうからね」

おばあちゃんは、一人になつたからつてこたえるような人には思えなかつたが、ブラッキーがどんなふうに死んだか、まいは知っている。センターで苦しい検査づけにあつたあげく、見つかつた腫瘍しゅようを取るために、骨盤までけずる大手術になり、結局、手術は失敗した。何もしないでいたら、少なくとも、もう少しは長く生きてたろう。

「ごめんね、ごめんね、おばあちゃんのそばで、家で死にたかつたのにな」とブラッキーの横で、ママは泣いた。

小さいころから、ママが泣くと、ブラッキーはいつもそばによって、なめたり鼻を寄せてきたりして、なぐさめてくれたのだそう。だからその時も、泣いているママをなぐさめようとしたのか、一生懸命しつぽをふろうとし、首をのばしてママの手をなめようとしたが、もうその力がなく、最後はしつぽがパタンと落ちて、ブラッキーは死んだ。

まいは、いったい、これが自分で本当に見たことなのか、それとも、何度も聞いたので見たつもりになっているのか、正直なところわからない。その場にいたことは、事実らしいのだけれど。^⑦ 小さいころから、この話をするたびママが泣くので、強烈な印象をもっていたことだけは確かだ。

そういう死に方だったから、ブラッキーがママにうらみをもっていると考えられなくもなかったが、まいにはそうは思えなかった。

「もしかしたら、ブラッキーが化けて出てるって、思ってるの？」

ママは、とんでもない、というふうに首をふった。

「ちがう、ちがう、その反対。ブラッキーは死んでからもわたしのことが心配で、大好きなおじいちゃんのところに行けないでいるのかもしれない、って、最近思うようになったの」

「ああ、ママのこと、駅までむかえに来てるって」

「そうそう」

なんと、自分に都合のいい考え方、とまいは一瞬^⑧あつけにとられたが、でも、今の話を聞いていると、確かにブラッキーは、そういう犬のような気がしてきた。ママは思い出したのか、また鼻をすすって泣いた。その時、網戸の向こうの暗やみで、何か音がした。まいとママは思わず目を見合わせた。ザッ……ザッ……ザッ……ザッ……ザッ……

それは、動物が歩いている音のように聞こえた。でもこの庭にはさくがあつて、外からは入れないはずだ。ま
いは全身が耳になったように、その音に集中した。カーテンがゆれた。

「だからね、ブラッキー」

ママは立ち上がり、窓の方へ向いていった。

「わたしはもうだいじょうぶ。もう、お前の好きなところへおゆき」
それから、

「よしっ」

と、大声でいった。

その時、またカーテンがゆれて、黒っぽい影が動いたように思った。^⑧ まいは息をのんだ。けれどもう、音は
何も聞こえず、外は静かになった。こちらを向いたママは、口をへの字に結んでいた。ブラッキーに心配かけな
いように、なみだをこらえているんだ、とまいは思った。

友達との間で話題になるような「怪談」ではなかったけれど、それに近いような、ぞくぞくとする何かを、
そのときまいは感じた。

それから数日して、もう黒い影は出なくなった、とママは少しさびしそうにいった。おばあちゃんに電話で話
すと、ブラッキーは愛情深い犬ですから、といったけれど、パパに話しても、そんなこと、ママの気のせいだよ、
ママはブラッキーのことで罪悪感をもっているから、とまるで本気にしない。何人かの人と一緒に見て、みんな
がそれを事実としてみとめたのなら別だけど、と。

パパのほうが、「冷静な大人の受けとめ方」なんだろうけれど。

(梨木香歩『西の魔女が死んだ 梨木香歩作品集』より)

問一 空らんⅠ、Ⅲに入るもつともふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 足 イ 腹 ウ 肩 エ 手 オ 耳 カ 口 キ 目

問二 — 部① 「でも、そうじゃないよって、おじいちゃんがいったの」とあるが、おじいちゃんがそのように言った理由がわかる部分を、本文から連続した三文で探し、その三文の初めと終わりの五字をそれぞれ抜き出しなさい。 ※句読点を含まない。

問三 — 部② 「そうだよね、とまいは、いつもより深くうなずいた」とあるが、なぜか。考えられるものとしてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 学校であったことにママが全く興味をもたないことがわかっていたから。

イ 学校であったことをママに知られてはいけな思っていたから。

ウ ママの話が学校での友人関係のことと重なる部分があったから。

エ ママの話が期待以上に怖くてぞくぞくとするような話だったから。

問四

~~~~線部A～Cの本文での意味としてもっともふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「分別のある」

- ア 別の理由がないか時々悩んでいること
- イ 全てを特別なことととらえられること
- ウ どんなことでも優しく受け入れてくれること
- エ 物事の判断をするにあたってよく考えていること

B 「買いかぶりすぎ」

- ア 実際以上に高く評価すること
- イ 何でも値切ろうとすること
- ウ 悪いことは絶対にしないということ
- エ 他の人のよさも自分のものにする事

C 「あつけにとられた」

- ア 事の予想外な様子についていけないさま
- イ 事の結論に面白みがなく残念がるさま
- ウ 事の意外さに驚きあきれるさま
- エ 事の結果が簡単に物足りないさま

問五 空らんⅡに入るもつともふさわしい語句を次から選び、記号で答えなさい。

ア 引率<sup>いんそつ</sup>    イ 応援<sup>おうえん</sup>    ウ 看病<sup>かんびょう</sup>    エ 護衛<sup>ごゑい</sup>

問六

——部③「それって、ブラッキーよりも人間あつかいされてないみたい」とあるが、ブラッキーのどのようなあつかいと比較してこのように思ったのか。おじいちゃんのブラッキーに対するあつかいについて具体的に書かれている部分を二十八字（句読点を含む）で探し、初めの十字を答えなさい。

問七

——部④「おばあちゃんの作戦勝ちだ」とあるが、おばあちゃんはどのように思っていたのか。当てはまらないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア あえて注意深くまいを見ないでばいきんだらけの畑にはだしでいけるようにと思っていた。

イ まいがキャーキャー言いながら土足で畑まで歩いてほしいと思っていた。

ウ まいがはだしで大地とのつながりを感じられるようにと思っていた。

エ 知らない景色の中を自分の足で歩いてほしいと思っていた。

問八

空らんⅣに入るもつともふさわしい語句を次から選び、記号で答えなさい。

ア うれしそう    イ くやしそう    ウ こわそう    エ たのしそう

問九 — 部⑤ 「なんとブラッキーは、わたしとドラム缶の間に立って、ものすごい声でそのドラム缶にほえ始めたのよ」とあるが、ブラッキーはなぜ、そのようにしたのか、次の文の空らんにあうように本文から七字で抜き出しなさい。

ブラッキーは、( ) としたから。

問十 空らんVには同じ接続詞が入るが、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア そのため    イ さらに    ウ つまり    エ または    オ でも

問十一 — 部⑥ 「今から思えば、ブラッキーには本当に悪いことをした」とあるが、その気持ちを別の言葉で言い換えている部分を本文から三字で抜き出しなさい。

問十二——部⑦「この話をするたびママが泣く」とあるが、なぜか。もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんは反対していたにもかかわらず、ブラッキーを動物医療センターで検査するようにママ自身が主張したことにより、ブラッキーが家で死ねなかったことに申し訳ないと思っっているから。

イ ブラッキーがママのいう事をきかなくなったことを残念に思い、動物医療センターに預けて検査したことで手術が必要なのがわかり、よりブラッキーの世話が焼けることに気がめいってしまったから。

ウ おじいちゃんが亡くなってから元気がなくなったブラッキーに対してできることは何もないと思い、おばあちゃんと一緒になって動物医療センターを頼ってしまったことに後悔していたから。

エ 大好きなブラッキーの最期を見届けるときに大泣きしてしまったママに対して、ブラッキーはいつものように慰めてくれなかったことについてママ自身が嫌われたととらえてしまっていたから。

問十三——部⑧「まいは息をのんだ」とあるが、なぜか。もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 泣き虫のママがブラッキーに涙を見せまいとして、泣くのをこらえていることに意地が悪いと思ったから。

イ 死んだはずのブラッキーが黒い影となって、まるでママを心配して来たかのように感じ驚いたから。

ウ 黒っぽい影が本物の幽霊だと思っって恐怖を覚え、息をすることもできなくなってしまったから。



エ ママの話は「怪談」ではないと最初から期待しておらず、最後まで怖くなくてママに裏切られたと感じたから。

問十四 この作品を読んで生徒たちが感想を話し合いました。間違っていることをいつている生徒を記号で答えなさい。

生徒A―幽霊が出てくる話かもしれないと思って、初めはドキドキしていたけれど、読んでいくにつれ、みんなからのブラッキーに対する愛情が強く伝わってくる話だったね。

生徒B―ブラッキーもママやまい、おじいちゃん、おばあちゃんのことを大切に思っていて、お互い家族のように想い合って過ごしていたんだね。

生徒C―ブラッキーが長生きできることを一番に考えて、ママとおばあちゃんがすぐに病院へ連れて行って手術ができたことは大正解だったね。

生徒D―ブラッキーはママに対してうらみとかはもっていないと思うし、逆にブラッキーはママのことが大好きだと思うよ。

二 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

また来た。

ビスケットを投げたが X 食わない。黙って僕を見つめている。

初めて来たとき 魚の骨を投げた。食わなかった。そのあと <sup>①</sup>来るたびに 何かを投げたが 一度も食わなかった。

やせた黒い犬だ。鑑札かんざつもない。愛想もない。食わない。そのくせ毎日のように 台所へ顔を出すのだ。

<sup>②</sup>僕は しびれをきらしていた。なんとか言つて貰もらいたかった。

ふと

僕はそれまでの 思いあがったほどこしが悔やまれた。

<sup>③</sup>その夜 僕は黒い犬と一緒にいた。僕は犬に何も与えず 犬も欲しがらず 黙って一緒に居た。星が美しく 犬の眼がやさしかった。それ以上に僕の眼がやさしかったのかも知れない。

しばらくして 犬は 飼犬の経験を話そうかと言つたが そうすれば 僕はサラリーマンの経験を話さねばな

らないだろうし 身の上を慰め合うのはつらいからよそう と僕は答えた。

そんな淋しい夢を抱えて 僕は翌朝 いつもの道を出勤した。

(吉野弘『犬とサラリーマン』)

問一 に入る語句としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア どうとう    イ どうしても    ウ やっぱり    エ しばらく

問二 ――部①「僕」のこの行為を言い換えている語句を詩の中から十字で抜き出しなさい。(句読点は含まない。)

問三 ――部②「しびれをきらしていた」の意味としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア あきらめられなくなった    イ 待ちきれなくなった    ウ ゆっくりできなくなった  
エ 認めたくなった

問四 — 部③でなぜ「黒い犬」は「僕」と一緒にいたのか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 僕のいつもと違う雰囲気黒い犬が敏感に感じ取っていたから。

イ 僕にわからない黒い犬のやさしさが何も言わなくてもわかったから。

ウ 僕と黒い犬との不思議な関係がとても大事なものであったから。

エ 僕が黒い犬を好きだという気持ちがとても十分に伝わっていたから。

問五 教室では生徒たちがこの詩を読んだ後に話し合いました。次の中で明らかに間違っている生徒を、記号で答えなさい。

生徒A—この詩では、この黒い犬との交流が夢か現実かはわからないけれど、お互いに交流しなかったことはかえって現実を直視せずに終われたことを意味していると思います。

生徒B—そんなことはないよ。あれは絶対に現実に起こったことだと思うなあ。黒い犬はきつと何でも知っている存在として描かれているのだと私は思います。

生徒C—何となく私には僕も黒い犬も作者そのもののように感じるので。だって、いつもの道を歩いていく僕の様子はとてもさわやかで何だか別々の存在には感じられないのです。

生徒D—この詩の一番の面白さは黒い犬と僕との何も与えず何もほしがない関係だと私は思いました。僕と黒い犬との静かな時間が流れていく様子がとても印象的な詩です。

三 次の問いに答えなさい。

A 次の文章を読んで空らんには「相対的」か「絶対的」のどちらかが入ります。その組み合わせとして正しいものを次から選び、記号で答えなさい。

人は誰でもみんなの中で「一番になりたい」とか「一番ほめられたい」とか思いますが、それと同じように、自分は「唯一の存在でありたい」とか「誰かと比べられたくない」と願うものです。この「一番になりたい」と他の人と比べたことで成立する状態のことを（A）な状態、一方「唯一」のように他の人から独立して成立する状態を（B）な状態と呼びます。

このように、この二つの言葉は対となる言葉で複雑に関係しあう言葉として存在しています。何故なら「一番」と思う（C）状態は誰にも負けないという意味で、それは（D）という意味にもなりますし、「唯一」という（E）な状態は他とは違うという意味ですので、「一番」という（F）な状態を指す言葉にもつながるからです。

- |   |           |           |
|---|-----------|-----------|
| ア | 相対的―A、B、C | 絶対的―D、E、F |
| イ | 相対的―A、C、E | 絶対的―B、D、F |
| ウ | 相対的―A、C、F | 絶対的―B、D、E |
| エ | 相対的―B、D、F | 絶対的―A、C、E |
| オ | 相対的―B、C、E | 絶対的―A、D、F |

B 次の単語の意味をあとから選び、記号で答えなさい。

①例のない

ア 少しもない      イ 珍しい      ウ 間違いない      エ 頼りない

②目を疑う

ア 思い悩む      イ 鋭い目つきをする      ウ 信じられない      エ 目を見開く

③猫をかぶる

ア 本性を隠すこと      イ あきらめること      ウ 厳しく監視すること

エ 人から相手にされないこと

④異口同音

ア 違うことを一齐に言い出すこと      イ 人々の意見が一致すること

ウ 意見の違いを理解すること      エ 同じ話をみんなが繰り返すこと

C 次の作家の作品をあとから選び、記号で答えなさい。

① 宮沢賢治      ② 芥川龍之介      ③ 夏目漱石

ア しろばんば      イ 杜子春      ウ 野菊の墓      エ 坊っちゃん      オ 注文の多い料理店

D 次の漢字について、あとの問いに答えなさい。

①「防」という漢字の部首を次から選び、記号で答えなさい。

ア りっしんべん      イ こぎとへん      ウ おおざと      エ のぎへん

② 「弟」という漢字の画数を次から選び、記号で答えなさい。

ア 五画    イ 六画    ウ 七画    エ 八画

**四** 次の——部の漢字の読みを答えなさい。

ア 冬になるとこの辺は雪に閉ざされてしまいます。

イ あなたの説明にはどうしても納得できません。

ウ 少し傷んでいますがおいしいりんごです。

エ 私の一族は東村山に居住しています。

オ 裁ちばさみの使い方にはコツがあります。

**五** 次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

ア 誰かがいるケハイがしました。

イ ヘイソのふるまいを見ればきつとわかります。

ウ 彼女はとてもホガらかな人です。

エ 都市のチアンがどんどん悪化していきます。

オ 私の祖先には徳川家のカシンだった人がいます。

